

県中教研

特別支援教育部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 栗山 繁昭
題 字 金山 泰仁 先生

一人一人を見つめ、将来の姿を思い描く

指導主事 砂田 和美

今年度は、生徒の強みを生かして学習過程を工夫した授業をたくさん参観しました。研究大会では、生徒の実態を把握し、強みを生かした活動を取り入れた結果、本人が苦手と感じていることにも果敢に挑戦する生徒の姿を見ることができました。また、協議会では、新型コロナウイルス感染防止のため参加者が限定されていたものの、活発な意見交換が行われ、生徒の実態に応じた支援の大切さについて改めて確認できました。

いよいよ今年度から中学校学習指導要領が全面实施になりました。今回の改訂では、全ての生徒の将来も視野に入れた「生きる力」を付けることを目的の一つとして挙げています。その実現のためには、目の前にいる生徒はどのような個性や特性をもっているのかをしっかりと見て、個に応じた手立てを工夫することが大切だと考えます。各教科の学習指導要領の解説第4章 1「指導計画の作成上の配慮事項」では、困難を抱えている生徒の様子や、指導上の工夫の意図、個に応じた手立てが具体的に記されています。生徒のつまずきの背景を読み解き、無理のない範囲で継続した手立てを行うことで、「できた」と感じる体験が増えていきます。そして、この成功体験こそが、自立や社会参加、そして将来に向かおうとする生徒の背中を押してくれるのではないのでしょうか。

2019年度から、大学の教職課程で特別支援教育が必修科目になっています。これはインクルーシブ教育システムの構築に向けて、全ての教師が障害のある生徒に対する理解と認識を深めることが求められていることを意味します。生徒の多様性を認め、尊重していくことが求められるこれからの社会において、特別支援教育が果たす役割は大きいと考えます。今後も先生方には、学校の特別支援教育の要となり、生徒の将来の姿を思い描きながら支援を重ねていくことで、一人一人の生徒を輝かせていただきたいと思えます。

(東部教育事務所)

一人一人の成長を願って

部長 栗山 繁昭

今年度は、「特別な支援を必要とする生徒の個性や能力を伸ばし、自立と社会参加を推進するための指導はどうあればよいか。」という研究主題に、「生徒の教育的ニーズに応じた学習過程の工夫」という副題を設定し研究を進めてきた。

研究主題の解明にあたり第65回研究大会では、生徒一人一人の個性や能力を伸ばすための指導過程の工夫に重点を置いた授業が、東西両地区で行われた。

東部地区では、富山市立藤ノ木中学校1年英語科の授業を公開した。自己紹介のビデオレターを作成し、ALTに送ることに生徒は熱心に取り組むことができた。生徒が得意とするICT機器の様々な機能を活用することで、個に応じた配慮と指導が行われていた。

西部地区では、小矢部市立津沢中学校知的障害学級生活単元の授業と自閉症・情緒障害学級自立活動の授業を公開した。知的障害学級の生徒は、金銭のやりとりや買い物時のコミュニケーションの仕方を、買い物ゲームを通して模擬体験した。3名の生徒の特徴に応じた場面やねらいが設定されており、一人一人の個性や能力が引き出されていた。また、自閉症・情緒障害学級の生徒は、リモートで小学校の特別支援学級と交流を行った。小学校からの要望を受けて、タブレットを使用し部活動について紹介した。小学生からの質問に教師の助言や励ましを受けながら返答する姿が印象に残った。

どの授業も生徒一人一人の個性や能力を伸ばす工夫がなされており、生徒は達成感や成就感を味わうことができた。また、ICTの活用が分かりやすさやコミュニケーション能力を高める手助けとなっていた。今年度も新型コロナウイルス感染防止のため、撮影された授業や配信された授業を別教室で視聴した。コロナ禍が終息し、安心・安全な環境下で一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を充実させたいと願っている。

(高・高岡西部中)

第65回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（富山市立藤ノ木中学校）
令和3年10月19日（火）

西部地区大会（小矢部市立津沢中学校）
令和3年10月19日（火）

研究授業は、自閉症・情緒障害特別支援学級（1年生男子1名）で、堀薫教諭による英語「All about Me Poster～自己紹介をしよう～」が公開された。授業は、事前に複数のカメラで撮影して授業全体の様子と生徒の様子を撮影したものを協議会場で同時視聴した。

授業では、ALTから受け取ったビデオレターに対し、英語によるビデオレターを撮影して送信した。日頃から発声することや文字を書くことに困難を感じている生徒を支援するために、ALTの参加や、生徒が得意とするICT機器を取り入れることで、最後まで集中して取り組ませることができていた。前時に考えた自己紹介文をカード化して、順に提示しながら並び替えることで、まとまりのある文章に推敲したり、Googleドキュメントの音声入力機能で音読練習を行わせたりするなど、きめ細かな配慮と指導が光った授業であった。

砂田和美指導主事（東部教育事務所）からは、

- ・本時の見通しが生徒の目に付くところに、分かりやすく掲示されていてよかった。
- ・生徒にとってねらいがしっかりしており、必要感のある学習課題になっていた。
- ・スモールステップで繰り返し取り組ませるための支援と配慮がされていた。
- ・自然と発した言葉が、生徒を褒めたり励ましたりすることになり、意欲を奮い立たせており効果的だった。
- ・タイムスケジュールが見やすく示されており、振り返りがしっかりできていた。フォームでの振り返りで視点が明確化されていてよかった。ねらいからみてどこまで達成できていたか、生徒が自分の成長を自覚させることが振り返りの第一目的である。

等の助言をいただいた。



三浦 洋（富・岩瀬中）

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生男子1名、女子1名、2年生女子1名）で、上山寿美枝教諭による生活単元学習「自信をもって買い物できるようにしよう」、自閉症・情緒障害特別支援学級（1年生男子1名）で、市川義浩教諭による自立活動「相手を意識して、人と関わろう」が行われた。授業は各教室にカメラを設置し、観覧者は別室で授業の様子を視聴した。

生活単元学習の授業では、生徒一人一人の個性や能力を引き出すために、生活に結びついた買い物ゲームを授業に取り入れ、自分のほしい



商品を買う練習をした。また、振り返りの場面を設定することで、できるようになったことに気づき、自信をもって買い物する動機付けになった。

往蔵直美指導主事（西部教育事務所）からは、

生活単元学習は、生徒一人一人の個性を伸ばし、自立と社会参加をねらうものである。本時のねらいは、コミュニケーションを取ることと金銭感覚をもたせることであり、3人の特徴をよく捉えて、ねらいが設定されていた。途中レジが上手く作動しなかったときにみんなで一生懸命に考えている姿に互いの信頼関係が見えた。等の助言をいただいた。



自立活動では、小学校の特別支援学級と夏休みからICTを活用して自己紹介や学校紹介等の交流を行っており、今回

は小学生の要望を取り入れて、部活動紹介を行った。生徒は、自分の強みを生かしたタブレットを使用した。また、普段一人学級で授業しているため、小学生からの質問に返事することが難しそうではあったが、教師の温かな言葉掛けで乗り切っていた。

小島剛指導主事（西部教育事務所）からは、

自立活動は、生徒の弱みを克服したり、強みを取り上げたりすることで、困難を克服する活動である。授業の振り返りシートで、もっとゆっくり話せばよかったと振り返っていた。いつも励まし、失敗しても助けてくれる教師がいることで自信を積み上げている。等の助言をいただいた。

朽木 桃代（射・新湊中）